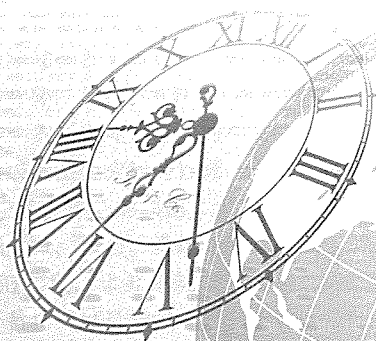


コーパスからわかる
言語変化・変異と
言語理論 2

小川芳樹

[編]



開拓社

伊那方言「づら」

—時制句を補部にとる認識様態のモダリティ—*

村杉 恵子

南山大学

1. はじめに

世界の「言語」の数が減りつつある。2009年、ユネスコは消失危機言語として2500を挙げているが、その中には日本国内で話されているアイヌ語、八丈語、奄美語、国東語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語も含まれている。しかし、多方言国家ともいえる日本において、言語消失の危機はこれら8つの言語にとどまらない。いわゆる「方言」を母語とする話者の数は、年々減少しつつあり、方言は、刻々とその多様性を失いつつある。

長野県南部の伊那・飯田地方周辺の方言（本稿では伊那方言と称する）には独特の特徴がある。¹ その1つとして、(1)において下線で示した「づら」を挙げることができる。² ()内は、その文のおおよその意味をいわゆる標準語で表したものである。

* 本稿は、拙著「伊那方言「づら」：統語的特徴に関する予備的研究」において提示した記述と説明を基盤とし、新たな記述を加えて分析しなおしたものである。長野県南部伊那方言についての詳細な文法判断と記述については、実母（村杉恵美子氏）に仰いでいる。また、黒木邦彦氏、江口弥優（飯田方言話者）ならびに南山大学外国語学部英米学科演習（筆者担当）のゼミ生、森田芳夫氏（伊那方言話者）、矢島規子氏（伊那方言話者）との方言についての談話から多くの示唆を得た。理論的な分析をするにあたっては、齋藤衛氏ならびに川村知子氏から貴重な示唆をいただいた。また、本稿全体について、匿名の査読者の方々に貴重なコメントをいただいた。ここに記して深く感謝する。本稿は、南山大学パッハ IA 研究奨励金（2017-2019）、科学研究費助成費（#17K0252）ならびに国立国語研究所共同研究プロジェクト（「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」）の研究プロジェクトの成果の一部である。

¹ 「づら」は長野県南部の他にも、静岡県や愛知県の一部でも用いられていると言われていたが、本稿は、筆者の実母（村杉恵美子、昭和12年から昭和30年まで伊那地方に居住）の母語である伊那方言の文法判断に基づき、その文法を記述し、分析を試みるものである。

² 多くの文献や記事においては「ズラ」と表記される場合が多い。しかし、本稿では「ズ」が共時的には、過去をあわわす「た」に関わると分析され、また通時的には完了の「つ」に推量の「らむ」の付いた「つらむ」の音変化である可能性もあることから、ここでは「づら」として統一的に表記する。

- (1) a. 昨日えつ あんた 畑に 行ったづら
 (昨日あたりに、あなたは畑に行っただしょう)
 b. 明日は雨づら
 (明日は雨だろう)

ある方言に特有の言い回しが、実際の方言とは異なる用法で、小説、漫画、アニメ映画などで（時に揶揄されるかのように）用いられることがあるが、「づら」もまたその例外ではない。近年、小学生を中心として人気のある『妖怪ウォッチ』のコマさんは、田舎から都会に出てきた妖怪として描かれているが、彼の発話は、(2)に示すように、末尾に付加される「づら」によって強く印象づけられる。しかし、それらの「づら」の用法は、実際の伊那方言では非文法的な文あるいは不適格な文と判断されるものを多く含んでいる。#の付与された文は、伊那方言話者にとって()内の意味を表す文としては不適格であると判断されることを示す。

- (2) a. #これ、いま、(自分が) 食べるづら
 (これを、今、(自分が) 食べます)
 b. #1づら! (点呼)
 (1!)

「づら」を用いる伊那方言話者には、(2)に示されているコマさんの「づら」の用法は奇異に聞こえ、一様にこれを非文あるいは不適格文であると判断する。

伊那方言には「づら」以外にも特有の文末表現は少なくない。伊那方言話者は、多様な文末表現についても、例えば(3)に示すように「づら」と「だに」を区別して用いている。「外は雪でしょうね」という推量の意味で「外は雪だに」とは言えず、また、外は「雪だよ」と話し手が聞き手の知らない情報を与えるときには「外は雪づら」とは言えない。

- (3) a. 外は雪づら (外は雪だろう)
 b. 外は雪だに (外は雪だよ)

さらに(4)に示すように「だに」は「に」と似た意味で用いられるが、場合によって「だに」がついたり「に」がついたり、その分布には一定の規則的な特徴がある。*の付された文は、それが非文法的であることを示している。

- (4) a. ざむし、食べるに (ざむし、食べるよ)
 b. *ざむし、食べるだに (ざむし、食べるよ)

- (9) a. あの人は誰づら (あの人は誰でしょう)
 b. 明日は雨づら (明日は雨でしょうね)
 c. あの娘はけなげづら (あの娘はけなげでしょうね)
- (10) a. あの電車は新宿からづら (あの電車は新宿からでしょう)
 b. コンサートは2時までづら (コンサートは2時まででしょう)
 c. (指を切ったんだって?) この包丁でづら (この包丁ででしょう)
 d. (学校を休んだって?) はやりのインフルエンザでづら (はやりのインフルエンザででしょう)

(10) に示したように「づら」は場所や時の後置詞句のみならず、方法や理由の後置詞句にも後続してあらわれうる。さらに、「づら」は(11)に示すように副詞にも後続することができる。

- (11) a. がちゃがちゃにづら (がちゃがちゃに(乱雑に)でしょう)
 b. バタンとづら (バタンとでしょう)

これらのパラダイムを見る限り、「づら」は、一見、文末であればどのような統語範疇にも後続しうる文末表現であるかのように見える。

しかし、その分布を詳細に検討すると、「づら」は単純な文末表現ではなく、いくつかの特殊な性質を担うことがわかる。例えば、「づら」は、(12)に示すように繫辞(「だ」)や形容動詞、ならびにいくつかの文末助詞には後続することができない。

- (12) a. 外は雪(*だ)づら
 b. (あの娘は)けなげ(*だ)づら (けなげでしょう)
 c. (あの娘は)けなげ(*な)づら (けなげでしょう)
 d. *ほんにどこにいくん なえ づら (本当にどこにいくんだろうね)

(12) に示した繫辞(「だ」)や形容動詞、ならびにいくつかの文末助詞に後続することができないという特徴は、「づら」の文末表現としての特徴をどのように示すのだろうか。なぜ、「づら」は繫辞(「だ」)や形容動詞、文末助詞に後続することができないのだろうか。

次節では、他の文末表現と比較することによって、「づら」の統語的な特性を検討してみよう。

2.2. 他の文末表現との共通点と相違点

「づら」はいわゆる標準語の(特に女性語に特徴的な)文末表現「わ」の特徴

と(意味は異なるが)統語的特性において重なる部分がある。

- (13) a. 明日は きっと 晴れる づら なえ
 (明日はきっと晴れるでしょうね)
 b. 明日は きっと 晴れる わ ね
 c. かわいかった づら (かわいかったでしょうね)
 d. かわいかった わ

例えば、(13)に示すように、「づら」も「わ」も、(時制を伴った)動詞句や形容詞句に後続し、文末助詞の中でも構造的に高い位置で対人モダリティを表す「な」「ね」「なえ」などに先行する点において共通する。すなわち、「づら」と「わ」はいずれも時制を持つ句を選択する。また両者とも形容動詞の連体形に後続できず((14)), また名詞化辞の「の」や疑問詞の「の」に選択されることはない((15)-(16))。

- (14) a. *(あの娘は)けなげな づら (けなげでしょう)
 b. *(あの娘は)けなげな わ
- (15) a. 芳夫は、またスイスに行く づら
 b. 芳夫は、またスイスに行く(*づら)のを楽しみにしている
 c. 三和子は、またスイスに行く わ
 d. 三和子は、またスイスに行く(*わ)のを楽しみにしている
- (16) a. 芳夫は、またスイスに行く の?
 b. 芳夫は、またスイスに行く(*づら)の?
 c. 芳夫は、またスイスに行く(*わ)の?

しかし、「わ」と「づら」には相違点もあるようである。まず、「づら」と異なり「わ」は、(17a-c)に示すように名詞句や後置詞句、副詞に後続することができない。一方、(12a-b)や(17d-e)から明らかのように、「わ」は繫辞の終止形「だ」に後続できる。

- (17) a. *明日は 雨 わ (明日は雨でしょうね)
 b. *あの電車は新宿から わ (あの電車は新宿からでしょう)
 c. *がちゃがちゃに わ
 d. 明日は雨(*だ)づら
 e. 明日は雨だわ

また、(18a-b)に示すように「わ」は補文標識「か」に選択されることはできない一方で、「づら」はそれが可能であり、(18d)に示すように「づら」は補文

内にもあらわれ得る。

- (18) a. *外は雪だ わ か?
 b. *明日 規子さんが来る わ か 電話できいてみよう
 c. 外は雪づら か? (外は雪だろうか)
 d. 明日 規子さんが来るづら か 電話できいてみよう

すなわち「づら」と「わ」はともに時制句 (TP) を選択する点において共通する特徴を持つものの、「づら」は単純に主文の文末表現であるとはいえ、ここに「づら」には、文末表現「わ」とは異なる統語的性質がある。

2.3. 「づら」の統語的特性に関する記述と一般化

では「づら」は、いったいどのような位置にあらわれるのだろうか。3節では裸句構造理論に基づいて分析を進めるが、その分析を進める基礎として、句構造的に、「づら」がどのような構造的位置にあらわれうるのかについて考えてみよう。上記の観察事実から、1つの記述的一般化がひきだされる。それは、「づら」は (19) に示すように、繫辞「だ」のあらわれうる位置のあたりで推量などの法性を表しているというものである。〈だ・づら〉は、「だ」ならびに「づら」のいずれもが〈 〉の位置に生起できることを示している。

- (19) a. あれは誰 〈だ・づら〉
 b. 明日は雨 〈だ・づら〉
 c. (あの娘は) けなげ 〈だ・づら〉
 d. あの電車は新宿から 〈だ・づら〉
 e. コンサートは2時まで 〈だ・づら〉
 f. (壁を塗ったんだって?) ベとベとに 〈だ・づら〉
 g. (指を切ったんだって?) この包丁で 〈だ・づら〉
 h. (学校を休んだって?) はやりのインフルエンザで 〈だ・づら〉
 i. ガチャガチャに 〈だ・づら〉
 j. バタンと 〈だ・づら〉

ところが、「づら」は (7) ならびに (8) ((20a-b) に再掲) にみたように、(時制やアスペクトを伴った) 動詞句や形容詞句に後続する一方で、「だ」はこの位置にはあらわれえない。この一見矛盾するかのように見える言語事実は、どのように統一的に説明されうるのだろうか。

(9), (10), ならびに (11) などの例 ((20c-g) に再掲) の分布に鑑み、繫辞「だ」は「づら」の前では音声的にあらわれえないとする仮定に基づく、「づら」

は文を補部とする要素として、その分布が統一的に説明される。以下の例において、[だ] は、繫辞「だ」が音声的に表出されていないことを示している。

- (20) a. 今ごろ、電車に乗ってる づら (= (7c))
 b. かわいい づら (= (8a))
 c. あの人 誰 [だ] づら (= (9a))
 d. 明日は 雨 [だ] づら (= (9b))
 e. あの娘は けなげ [だ] づら (= (9c))
 f. あの電車は 新宿から [だ] づら (= (10a))
 g. がちゃがちゃに [だ] づら (= (11a))

繫辞「だ」と「づら」が隣接することができず、繫辞が「づら」の前では音声的にあらわれえないという特徴は、本稿の冒頭で紹介した「だろう」の特徴に通ずるものである。すなわち「づら」は、認識様態のモダリティ (epistemic modality) を表す「だろう」と意味的な共通点があるのみならず、統語的な分布においても共通するところがあるのである。

- (21) a. 今ごろ、電車に乗ってる だろう
 b. かわいい だろう
 c. あの人 誰 [だ] だろう
 d. 明日は 雨 [だ] だろう
 e. あの娘は けなげ [だ] だろう
 f. あの電車は 新宿から [だ] だろう
 g. がちゃがちゃに [だ] だろう

では、伊那方言の「づら」は、「だろう」と共通する統語的な特性を持つのだろうか。次節では、「だろう」と「づら」の統語特性について対照的に考察しつつ、上記に示した記述について、より詳細に分析してみよう。

3. モーダル表現としての「づら」: ミニマリスト理論に基づく分析

前節では「づら」の持つ意味的特徴は、文末にあらわれる「わ」とは性質を異にし、「だろう」と同様に認識様態のモダリティ (epistemic modality) である可能性があることを示した。上記の記述に基づいて、以下では「づら」に見るモーダルとしての特異性に鑑みつつその統語的特徴を分析してみたい。

Saito (2015) は、上田 (2007), Haraguchi (2012), Saito and Haraguchi (2012) など多くの先行研究で観察されてきた法表現についての階層性が、生

成文法のミニマリスト理論のもとで、自然に説明される可能性を示唆している。

上田 (2007) は、モーダルが (22) のような構造をもっていると提案している。ここで日本語のモーダルと称されるものは、時制を担わないがモーダ的な意味を持つ要素であり、「してもよい」「かもしれない」などの(時制を伴う)形容詞的活用を含む表現や「できる」などの(時制を伴う)動詞は含まれない。

(22) [U-modalP [E-modalP [TP... T] E(pistemic)-modal] U(tterance)-modal]

上田 (2007) は、E(pistemic)-modals には「だろう」「でしょう」「(否定推量の)まい」、U(tterance)-modals には「ろ」「え」「なさい」「(否定命令の)な」「よう」「ましよう」などが含まれるが、1つの句に2つのモーダルは共起できないと指摘している。

- (23) a. 君はそこへ 行くだらう (*な)
(君はそこに行ってはならないでしょう)
b. 太郎はそこへいく まい (*だろう)
(太郎はそこへは行かないだろうと思う)

Saito (2015) は、この一般化が、句構造規則によって構造的な位置が最初から決まっているとするとする枠組みを仮定せずとも、ミニマリスト理論の下で説明されうることを指摘している。例えば英語の例をみてみよう。

- (24) a. *John may can solve the problem
b. John may be able to solve the problem

現代英語において、単文に法を表す助動詞は1つしか含まれないとする観察はよく知られている事実である。しかしなぜ1つしかあられないのかについては、説明が与えられる必要がある。

句構造規則を仮定すれば、一定の法があらわれる構造的な場所が1つしかないという説明も可能となるだろう。しかし、裸句構造理論に基づくミニマリスとアプローチでは、この選択肢はない。Saito (2015) は、英語の法助動詞の場合と同様に、日本語モーダルの特徴もまた、その形態的・意味的性質の帰結として説明が与えられなければならないと論じている。具体的には、日本語モーダルが、TP(時制を伴う命題)あるいはvP(時制を伴わない命題)を補部として選択すると仮定することにより、上田(2007)の一般化を捉えることができると提案している。(詳細はSaito(2015)を参照されたい。)

本稿では、Saito(2015)の提案の中で、本論に直接関係する認識様態のモダリティ(epistemic modality)を表す「だろう」に絞って考察することにしよう。

う。Saito(2015)は、「だろう」などの表現は、その特性として、その補部に、TP(Tense Phrase)を選択すると分析している。主要部であるTは、現在あるいは過去のいずれをも担い、具体的には動詞「-る」形あるいは「-た」形、もしくは形容詞「-い」形、あるいは「-かった」形を選択する。

- (25) a. 太郎はそれを食べるだろう
b. 太郎はそれを食べただろう
c. その冬は寒いだろう
d. その冬は寒かったらう

(26)にみるように、認識様態のモダリティ(epistemic modality)を示す「だろう」は動詞や形容詞の語幹に接辞としてあらわれることはできない。

- (26) a. *太郎はそれを食べだらう
b. *その冬はさむだらう

Saito(2009, 2015)によれば、「だろう」は、時制を伴う命題を補部として選択し、この特徴が上記の(23)に示されたModalPが1つしかあられない性質についても説明すると論じている。すなわち、T(時制)を選択する認識様態のモダリティ(epistemic modality)「だろう」は、時制を欠くModalPを補部にとることができないためであると考えられている。

この分析は、伊那方言の「づら」についても説明力を持つ。伊那方言においても、単文には1つの法表現しか許されない。

- (27) 太郎はそこへいく まい(*づら)
(太郎はそこへは行かないだろうと思う)

また、「づら」は、時制(T)を伴った命題を選択し、動詞や形容詞の語幹に認識様態のモダリティ(epistemic modality)「づら」が接辞としてあらわれることはない。

- (28) a. 太郎はそれを食べるづら
b. 太郎はそれを食べたづら
c. その冬は寒いづら
d. その冬は寒かったづら
(29) a. *太郎はそれを食べづら
b. *その冬はさむづら

このことは、(20c-g)と(21c-g)に述べた繫辞に関する共通点も説明しよう。

る。先にも触れたように「だろう」と「づら」は、共に音声的にあられない繫辞「だ」に導かれた句に後続する。「だ」は、「だ」が音声的には表れないことを示している。以下に(20)と(21)を再掲する。

- (20) a. 今ごろ、電車に乗ってる づら (= (7c))
 b. かわいい づら (= (8a))
 c. あの誰 [だ] づら (= (9a))
 d. 明日は 雨 [だ] づら (= (9b))
 e. あの娘は けなげ [だ] づら (= (9c))
 f. あの電車は 新宿から [だ] づら (= (10a))
 g. がちゃがちゃに [だ] づら (= (11a))
- (21) a. 今ごろ、電車に乗ってる だろう
 b. かわいい だろう
 c. あの誰 [だ] だろう
 d. 明日は 雨 [だ] だろう
 e. あの娘は けなげ [だ] だろう
 f. あの電車は 新宿から [だ] だろう
 g. がちゃがちゃに [だ] だろう

「だろう」や「づら」に先行する「だ」が形態・音韻的な理由によって発音されないとする、(30c)ならびに(31c)が示すように、繫辞の時制が過去(「だった」)であるときには、そのままの形で音声化されることを予測する。実際、その予測は言語事実と矛盾しない。

- (30) a. 雨 [だ] だろう
 b. 雨 [だ] づら
 c. 雨 だった づら
- (31) a. 東京から [だ] だろう
 b. 東京から [だ] づら
 c. 東京からだった づら

また、冒頭(5)で紹介した湯澤(2003)の観察「明日は学校へ行くんづら」といった「ん(の)」を「づら」が選択する点においても、「づら」の特徴は「だろう」(「明日は学校へ行くのだろう」)の特徴と共通する。

- (32) a. 明日は学校へ行くん [だ] づら
 b. 明日は学校へ行くの [だ] だろう

「ん [だ] づら」は「の [だ] だろう」と同じ意味を持つ。ここに、「づら」は「だろう」と同様に、TPを補部にとる接辞であると分析される。「づら」は「だろう」と意味的にも統語的にも共通する特徴を持ち、「づら」は「だろう」と同様に時制句(TP)を補部として選択する。このことは、Saito(2015)の提案が、伊那方言「づら」の特性についても、説明力を持つ可能性を強く示唆するものである。³

しかし、「づら」と「だろう」には、相違点もある。「づら」と「だろう」が何を選択するかについては、共通した特徴を持つ。両者はSaito(2015)の述べるように時制を含む命題を選択する。しかし、「づら」と「だろう」が、何に選択されるのかには違いがあるようなのである。(33b)と(34b)に示されるように、「づら」は複合名詞句の中にあらわれることはできない。

- (33) a. ?わざわざ雨が降るだろう週を選んで、行くことはない
 b. *わざわざ雨がふるづら週を選んで、行くことはない
- (34) a. ?あの子が毎週通うだろう道を 念のため歩いてみた
 b. *あの子が毎週通うづら道を 念のため歩いてみた

「だろう」は、時に文修飾句としての複合名詞句内にあらわれることができるとする話者もいるが、伊那方言では、(少なくとも今回のインフォーマントによれば)関係節あるいは文修飾句の一部として「づら」はあらわれえない。「づら」を選択しうるものは、「だろう」のそれとは異なるのである。これについては今後の課題としたい。

4. 過去のみのをあらわす「つら」

伊那方言には、「づら」の他に「つら」という静音の異形と、「つ(づ)」を伴わない「ら」も存在する。

³ 日本語のモーダルは、時制を持たない要素であると定義されている。上述したように、「～かもしれないだろう」「～してもよいだろう」はモーダルの意味を有するが、「しれない」ならびに「よい」は形容詞であると考えられる。したがって、「かもしれないだろう」「～かもしれないだろう」「～してもよいだろう」「～してもよかったですら」といった文は文法的に適格である。同様に伊那方言においても以下のような例は文法的である。

- (i) 明日 晴れるかもしれないづら
 (ii) こんなふうにしてもいいづら

この記述は、「だろう」や「づら」が時制を含む要素を選択するとする分析によって説明される。

- (35) a. いっつら (いっただろう)
 b. あっつら (あっただろう)
 c. いったら (いったでしょ?)
 d. あったら (あったでしょ?)

一見すると自由変異であるかのように見える3つの接辞には、意味的文法的に相違点があることに触れておこう。

まず、「づら」と「つら」という清音の異型とを比較してみよう。「づら」と「つら」は、意味的には推量を含むという点において、伊那方言では2つの形式が共存しているように見える。(36)に示された例はすべて文法的であり、(36a)と(36b)、ならびに(36c)と(36d)の意味に差はない。

- (36) a. きのうえつ 畑 いっづら (きのうあたりに畑にいっただしよう)
 b. きのうえつ 畑 いっつら (きのうあたりに畑にいっただしよう)
 c. さぞ、つらかったづら (さぞ、つらかったでしよう)
 d. さぞ、つらかつつら (さぞ、つらかったでしよう)
 e. きのう、おたぐり食べたづら (きのう、おたぐりを食べたでしよう)
 f. きのう、おたぐり食べつら (きのう、おたぐりを食べたでしよう)

ここで特に興味深いのは、「つら」は、(時制やアスペクトを持つ)動詞に自由につく「づら」とは異なり、動詞や形容詞の語幹につき、それが過去あるいは過去完了の意味しか持たない点である。

- (37) a. 明日えつ、畑にいくづら (明日あたりに 畑にいくでしよう)
 b. *明日えつ 畑 いっつら (明日あたりに 畑にいくでしよう)

「づら」がどんな時制やアスペクトを担う動詞とも共起できるのに対し、(37b)のように「明日」という未来の時を表す副詞と「いっつら」は共起できない。ここで導き出される一般化は、「づら」が過去のみならず未来についても表す生産的な表現であるのに対して、「つら」は、動詞の語幹に接辞としてつき、過去あるいは過去完了の意味しか用いられないということである。

「つら」と「づら」が共存していることに筆者が気付いたのは、湯澤(2003)の集めた伊那方言の膨大な発話資料を整理していたときのことである。ここに、方言を記録し、記述し、文字化して後世に残す意義が見いだされる。湯澤(2003)の挙げた例を示しておこう(例文は、原本のままである)。

- (38) a. 食べたくなってキツラ。たけだのおたぐりはうまいぜ。
 b. コネエダ 一緒に電気館で 映画を見ツラ?

(38a)は、「食べたくなってきたでしよう。たけだのおたぐり(馬の腸を煮込んだ伊那谷に伝わる郷土料理)はおいしいよ」という意味であり、(38b)は、「このあいだ、一緒に電気館で映画をみただろう?」という意味である。この記述をもとにして、今回の研究プロジェクトのインフォーマントに、(37)ならびに(39)のパラダイムを示したところ、上記の一般化と矛盾しない文法判断が得られている。

- (39) a. 来月、電気館で、映画をみるづら?
 (来月は電気館で映画を観るでしよう?)
 b. *来月、電気館で、映画をみつら?
 (来月は電気館で映画を観るでしよう?)

(37b)ならびに(39b)は、いずれも非文であると母語話者に判断されているが、それは、明らかに未来を示す副詞的な要素と「つら」が共起できないという文法知識を、母語話者が無意識にもっているためである。

以上の議論をふまえると、「つら」が動詞などの語幹を選択するのに対して、時制句を選択する「づら」と述べることができる。

最後に、動詞などの語幹を選択する「つら」と、(繋辞を含む)時制句を選択する「づら」との中間的な特徴を示す「ら」のふるまいについても触れておこう。「ら」は聞き手の同意を求める意味をもつ。

「づら」は前述したように繋辞「だ」のあらわれうる位置のあたりで推量などの法性を表す。〈だ・づら〉は、「だ」ならびに「づら」のいずれもが〈 〉の位置に生起できることを示している。一方、「ら」は、「づら」とは異なり、名詞句や後置詞句のような名詞性を伴う統語範疇に後続することができない。この経験的事実は〈 〉の位置において〈*ら〉として記す。

- (40) a. あれは誰 〈だ・づら・*ら〉
 b. 明日は雨 〈だ・づら・*ら〉
 c. (あの娘は)けなげ 〈だ・づら・*ら〉
 d. あの電車は新宿から 〈だ・づら・*ら〉
 e. コンサートは2時まで 〈だ・づら・*ら〉
 f. (指を切ったんだって?) この包丁で 〈だ・づら・*ら〉
 g. (学校を休んだって?) はやりのインフルエンザで 〈だ・づら・*ら〉

ところが、「ら」は(時制やアスペクトを伴った)動詞句や形容詞句には後続する。

- (41) a. 今日えつ あんたは 畑 行くら
(今日あたり, あなたは 畑に行く(ん)でしょ?)
b. きのうえつ あんたは畑 行ったら
(昨日あたり, 畑に行った(ん)でしょ?)
c. 今ごろ, 電車に乗ってるら (今ごろ, 電車にのっているよね)
d. 今ごろ, 駅に着いてるら (今ごろ, 駅に着いているよね)
e. 明日は雨だら (明日は雨でしょ?)
f. 昨日は雨だったら (昨日は雨だったでしょ?)
(42) a. かわいいら (かわいいでしょ?)
b. かわいかったら (かわいかったでしょ?)

「づら」が推量の意味を強く持つものに対して, 「ら」は相手に同意や同感を求める伊那方言話者の内省は, 東京方言において「でしよう」と「でしょ」の相違に近い。それは「つら」と「ら」においても同様であり, 例えば下に示すパラダイムにおいて, 3つの文の意味のニュアンスは異なる。

- (43) a. 来年 引っ越すって ゆったづら
b. 来年 引っ越すって ゆつつら
c. 来年 引っ越すって ゆったら

伊那方言話者によると (43a) と (43b) は「来年には引っ越すと言ったでしょう」という過去に推論した未来におこりうる出来事を表すのに対して, (43c) は, 聞き手を責めているようなニュアンスを含みうる文で, 「来年には引っ越すっていったでしょ」(「引っ越すと言ったのに, 引っ越さないの?」)と念を押すような文であるという。

このような意味の差を持つ「づら」と「ら」は, 統語的にもそれらが選択する要素に差がある。2節と3節で論じた「づら」は繫辞「だ」の後にはあらわれないが, 「ら」は繫辞「だ」の後にはあらわれうる。ミニマリスト理論の下では, 「づら」は, 繫辞「だ」を含む時制句を補部を取るのに対して, 「ら」は繫辞「だ」を含まないが, 少なくとも(時制を伴う)形容詞や動詞を選択すると一般化することができる。

仮に本論で提示した分析が説明力を持つとしても, 残された問題がある。そのうちの一点について, 最後に指摘しておきたい。それは, なぜ「(っ)つら」が, 現代日本語において, 過去の意味しか持たないのかという問題である。

齋藤衛氏 (p.c.) は, それは「つら」には「た」と「づら」の一部が音声的に縮約された過程を含むためである可能性を筆者に指摘している。すなわち,

「た」の一部 /t/ と「づら」の一部 /ura/ が縮約された結果生じた /t(s)ura/ (つら)」が, 動詞の語幹を選択するとするものである。

この仮説は「つら」が動詞の語幹を選択すると提案する本論の分析と矛盾するものではない。

- (44) 動詞の語幹 (Stem) + ta + dura
⇒ Stem + /t/ + ⟨a+d → φ⟩ + /ura/
⇒ Stem + /tura/

この示唆は, 少なくとも現代日本語の動詞活用の特徴と「つら」の分布を正しく説明する。

- (45) a. 書いつら (kak(i)-t+ ⟨a+d → φ⟩ + ura)
b. 見つら (mi-t+ ⟨a+d → φ⟩ + ura)
c. 食べつら (tabe-t+ ⟨a+d → φ⟩ + ura)
d. 泳いづら (oyog(i)-t+ ⟨a+d → φ⟩ + ura)
e. 呼んづら (yob-t+ ⟨a+d → φ⟩ + ura)
f. 読んづら (yob-t+ ⟨a+d → φ⟩ + ura)

さらに, この縮約仮説は, なぜ「つら」が過去の推量の意味しか持ちえないのかについて自然な説明を与えうる。それは, 「つら」には基底に「た」(過去)と「つら」(推量)という両方が含まれ, それが音声的縮約を受ける過程を経ると考えられるためである。この音声的縮約は, 他の言語現象にも広く説明力をもつ可能性があるが, これについては, 今後の研究課題としたい。

いうまでもないことであるが, 伊那方言話者がそのような文法を意識的にもっているとは考えにくい。伊那方言話者が無意識にもつ文法知識に, 本稿で述べたような文法が実在するとすれば, それは方言が言語と同じステータスをもって言語理論に貢献できることを意味するだろう。

5. まとめにかえて

持続可能な社会は, 多様性をみとめあうことにおいて実現可能となりうる。言語は人のアイデンティティであり, 方言の多様性をみとめ, 守ることは, 持続可能な社会を築くための基礎となる。

本稿は, 消えゆく方言の特徴を記録することの緊急性に鑑み, 伊那方言を特徴づけてきた「づら」の文法について, 湯澤 (2003) のデータを整理し, それを基礎として記述した。生成文法理論を背景として, パラダイムを作り, 母語

話者に文法判断を仰ぐことによって、伊那方言の文法を記述し、一般化し、そこで観察された事実と一般化について、生成文法理論の枠組みで説明することを試みた。

本稿では、伊那方言「づら」は認識様態のモダリティ (epistemic modality) の表現であり、その選択の特性に関して「だろう」と共通することを示している。Saito (2015) においては、「だろう」などのモダリティ (epistemic modality) がその補部に TP (Tense Phrase) を選択すると提案されている。本稿では、その分析が、伊那方言「づら」についても説明力を持つことを論じ、伊那方言「づら」の統語的分布もまた、選択的な特性によって説明されうることが示唆されるものである。

参考文献

- Haraguchi, Tomoko (2012) "Distributions of Modals and Sentence Final Particles: Selection or Something Else?" Presented at the Thirteenth Workshop of the International Joint Research Project on Comparative Syntax and Language Acquisition (February 20, 2012), Center for Linguistics, Nanzan University.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 上・下』大修館書店, 東京.
- 仁田義男 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房, 東京.
- 村杉恵子 (2018) 「伊那方言「づら」: 統語的特徴に関する予備的研究」『アカデミア』103, 1-27, 南山大学.
- Saito, Mamoru (2009) "Selection and Clause Types in Japanese," Presented at the International Conference on Sentence Types: Ten Years After (June 26-28, 2009), Goethe Universität Frankfurt am Main.
- Saito, Mamoru (2015) "Cartography and Selection: Case Studies in Japanese," *Beyond Functional Sequence*, ed. by Ur Shlonsky, 255-274, Oxford University Press, New York.
- Saito, Mamoru and Tomoko Haraguchi (2012) "Deriving the Cartography of the Japanese Rightperiphery: The Case of Sentence-final Discourse Particles," *Iberia* 4(2), 104-123.
- 上田由紀子 (2007) 「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」『日本語の主文現象——統語構造とモダリティ』, 長谷川信子 (編), 261-294, ひつじ書房, 東京.
- 湯澤敏 (2003) 『おらが知ってる伊那の方言』しんこう社, 伊那市.

コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 2

編者 小川芳樹
発行者 武村哲司
印刷所 日之出印刷株式会社

2019年11月27日 第1版第1刷発行©

発行所 株式会社 開拓社

〒113-0023 東京都文京区向丘1-5-2
電話 (03) 5842-8900 (代表)
振替 00160-8-39587
<http://www.kaitakusha.co.jp>

JCOPY <出版者著作権管理機構 委託出版物>

ISBN978-4-7589-2276-0 C3080

本書の無断複製は、著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（電話 03-3513-6969, FAX 03-3513-6979, e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。